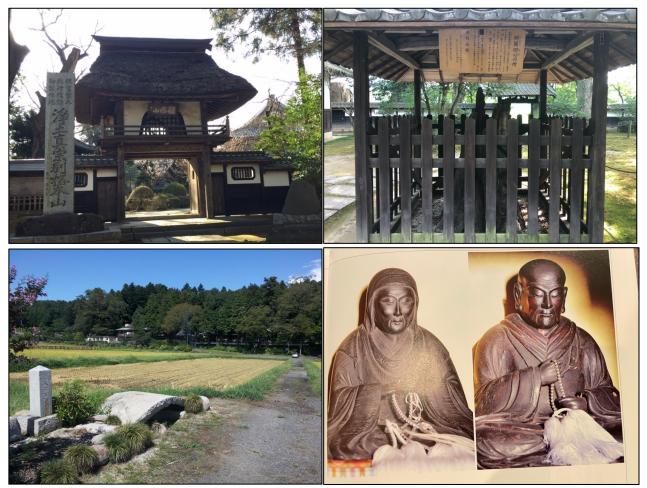
## 親鸞聖人を紐解く:関東編①一門弟集団「二十四輩」の展開

南條了瑛

twitter: @nancurry0909

# ―稲田草庵の跡・笠間市西念寺(親鸞聖人が最も長く住んだと推定される地)



(出典:今井雅晴『親鸞の風景』、https://sakuraibaraki.localinfo.jp/posts/4785649/)

・「浄土真宗開闢之地」(山門のすぐ右側の石碑) / 「真宗最初門」(本堂はいって正面の額) →なにをもって開闢?最初?

「専修念仏停止によって越後にご流罪になられ、赦免の後は関東に赴かれて他力念仏のみ教えを 人々に伝えられるとともに、『教行信証』の執筆にとりかかられました。他力念仏のみ教えがま とめられた本書は、浄土真宗の根本聖典という意味でご本典と呼ばれています。そして、そのご 本典の記述によって、その成立を親鸞聖人52歳の時、すなわち元仁元年・1224年とみて、 この年を立教開宗の年と定めています。」

(本願寺派第25代専如門主「親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年についての消息」)

#### ・「弁円回心の桜」

「山も山 道も昔にかわらねど かわりはてたる我こころかな」 ※一水四見

## 一弟子ではなく門弟

•『歎異抄』第六条

「親鸞は弟子一人ももたずさふらう。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念仏まふさせさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ。弥陀の御もよほしにあづかて念仏まふしさふらうひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼のことなり」

→親鸞が弟子を一人も持たないと言い切った理由は、「あらゆる者は私自身のはたらきによって念仏するのではなく、阿弥陀如来の力によって念仏するからである」。これは親鸞自身による「同朋」などの表現にも確認できる。この姿勢は後世、「御同朋・御同行」という言葉によって、浄土真宗教団のあるべきすがたとして重視されることとなる(すべては仏弟子としてみな同等)。代わりに、教えにであう時間的前後の違いとして、「同門の弟」=「門弟」と呼ぶようになる。

### 一門弟としての二十四輩

- ・門弟のうち、後世、とくに影響力のあった人たち(およびその開基寺院)を指す。
- ・「二十四輩牒」と呼ばれる一覧名簿 ・本願寺を中心としたつながりからの選定

第一 性信/第二 真仏/第三 順信/第四 乗然/第五 信楽/第六 成然/第七 西念/第八 証性/第九 善性/第十 是信/第十一 無為信 (無為子とも)/第十二 善念/第十三 信願/第十四 定信 第十五 入西/第十六 入信 (穴沢)/第十七 念信/第十八 入信 (八田)/第十九 明法/第二十 慈善/第二十一 唯仏/第二十二 唯信 (戸森)/第二十三 唯信 (幡谷)/第二十四 唯円 (鳥喰) (「二十四輩牒: 願入寺本」参照)

見やすいサイト <a href="https://www.shin.gr.jp/shinran/24/">https://www.shin.gr.jp/shinran/24/</a> (親鸞聖人を訪ねて(真宗教団連合))<a href="https://www.shin.gr.jp/shinran/24/">
※「六老僧」との違い

### 一寺格(僧階)としての二十四輩

・親鸞 400 回忌法要(1661 年)での記録 院家・内陣・溢余・余間・定衆・<u>二十四輩</u>・初中後・飛櫓・総坊主(『大谷本願寺通紀』)

→「二十四輩」という門弟の呼称は、江戸時代に、彼らを開基とする寺院の呼称にもなった。二十四輩としての寺院になるには、寺院由緒の有無が大きな要素が大きな評価基準であった。よって、各地で<u>多様な親鸞伝</u>が生まれたと考えられる。こうした寺院由緒の宗教的伝承は、人々の魅力となり、二十四輩寺院巡拝というかたちで隆盛するようになる。

#### 一二十四輩が語る多様な親鸞伝

・「親鸞の幽霊済度譚」(茨城県・無量寿寺の伝承)

まだ禅宗寺院であった頃、当地に住む十九歳の妻が難産のため死んでしまいました。親戚一同は、ねんごろに 弔い、寺院境内に葬りました。いつの頃からか、境内から、若くして死んだ妻が迷いの幽霊となって現れるよ うになったという話が広まりました。幽霊を恐れた人々はお寺にお参りしにくくなり、そのお寺は無住となっ てしまいました。困り果てた村人は、稲田から鹿島へ訪れていた親鸞聖人に、これまでの苦悩を伝え、幽霊を 救ってやってほしいとお願いしました。これを聞いた聖人は浄土三部経の文字を一字ずつ小石に書き写し、そ れらの石を幽霊が出る墓へ埋め、念仏称えました。すると、たちまちに恐ろしい幽霊は菩薩の姿に変じ、光を 放ち西へ飛び、無事往生を遂げたといいます。村人たちは、親鸞聖人はただものではないと語り合い、聖人のいる稲田へ参り、幽霊が往生したと御礼し、皆ともども涙を流して喜びました。(『無量寿寺略縁起』より要約)

### 一「親鸞の大蛇済度譚」(栃木県・蓮華寺の伝承)

昔、嫉妬に狂った女が、夫と妾を食い殺して大蛇と化し、よどんだ川に棲む人食い大蛇として村人を苦しめていました。村人は、その蛇を鎮めるために、毎年九月八日に娘を一人いけにえとして差し出していました。ある年、大沢家の一人娘がいけにえとなりました。しかし、この地を訪れた親鸞が念仏を称えたところ、女の嫉妬は消えて極楽往生をとげ、娘は救われました。再びいけにえを準備する必要もなく、蛇の水害からたちまちに逃れることができました。この時、天から蓮華の花がふってきたので、人々はこの地を「花見ヶ岡」と名付けました。のち、親鸞のために建てた草庵が、蓮華寺のはじまりであったと言われています。なかでも大沢家は親鸞聖人のことを厚く尊敬します。大沢家は神社の家柄であるにもかかわらず、ひそかに親鸞聖人を敬い、阿弥陀仏に帰依します。ここに集まった人は勿論のこと、遠近各地より人々が親鸞聖人と出遇い、数え切れないほど多くの人々が浄土真宗という教えを称賛するのであります。(『二十四輩順拝図会』より要約)